

第百八話

頼光朝臣瘧病事付土蜘蛛退治事

『前太平記』上 卷第十七 三三七頁から三四一頁より

[頼光病む]

頼光朝臣は、一条大宮にある場所によくお付き合いなされる方（中納言維仲卿の御息女）がいて、時々行き来をなさっていたが、今夜その場所におでかけになってお帰りになる道中ずっと、ちょうどそのころ秋の半ばで、冷たかった早朝の風が、

冷やゝかなりし朝風の風、

身に染み入るように思われてから、頭痛が激しく、道中も耐え難くて、かろうじて

身に染みじみと覚へてより、 頭痛甚だしく、 路次も堪え難くて、 漸

住まいに帰り着いて、とうとう悪寒で身震いし、後には高熱が燃えるかのように、

宿所に帰り着きて、 愈悪寒戦慄し、 後には大熱燃ゆるが如く、

汗が湧き出るようで、非常にお苦しみになった。四天王始め近臣の面々は、青ざめ

自汗湧くが如くにて、 甚だ悩み給ひけり。

たように看病する。この次第のことを天皇もお聞きになったので、すぐに典薬頭

(老) 重雅に質問が下される。重雅は脈を診断して申し上げたことは、「夏の暑さに

「夏暑に傷られて、

(お体を) 害されて、秋にきつと瘡(貳)を発症するのは当然なことである。諸々の

秋必ず瘡を發するは理の常なり。

瘡はすべて風から起こる。その病の原因については、湿気を除くのでは及ばないで

諸瘡皆風より生ず。

其病因に付きて、

風湿を驅るには如じ」

あろう」と言って、一通り(薬を)調達する。すぐに薬を煎じてお飲みになったが、まったくその効果はなく、毎日御病気にお苦しみになる。それゆえ、重雅を始めとしたその時の名医が、大人数で評議して、陰陽表裏を論じ、血の循環の異常を考えて、百薬を尽くして(病状を)落ち着かせるが、熱は依然としてさめず、このような状態になったのも、十日余りにして、ついには間日(參)にさえもぶり返した。血のつながりのある一族分家は言うに及ばず、京にいる武士、諸国の大名は御殿の内に席を取り合い、門前に列を成していた。

[頼光妖怪を斬る]

こうして三十日余りがたって、まだ(病状は)落ち着かなかつたが、わずかに熱が冷め始めであった時に、四天王及び一緒に看病していた者たちも、皆に休暇をお

少し醒め方にて有りける間、

与えになって、人気のない静かな場所で休んでいた。頼光朝臣は、たった一人ではほのかな明かりの下に枕を斜めに高くして、過去や将来のことをとりとめもなく、と

幽かなる燈の下に枕を敬て、

来し方行く末を其はかどなく

めどなくお思い続けになるにしても、一条辺りのことが気がかりで、この三十日余

思ひ続け給ふにも、

一条辺りの事覚束なく、

此三十日余りは

りは便りさえも差し上げていないので、さぞかし不審に思っておられるだろうなど

音信さへも聞こえねば、

さこそ不審く思ひ給ふらめなど、

と、様々なことを考えての夜が、夢ともなく、現実とも感じられないところに、誰

取り集めたる思ひ寐の、

夢ともなく現とも覚えぬに、

ともなく、

誰とも無く、

私の夫が来そうな夜である。それを蜘蛛が動きであらかじめ兆しを見せているよ

我が背子が、来べき宵なり、さゝがにの、蛛の振舞ひ、予て著しも (肆)

と聞こえた時に、不思議だと思い、目を開きご覧になると、灯の光から一人の僧の

姿をした者が現れて、「どんな具合か、頼光。気分はどのようであらうか」

「何にや頼光。心地は何と在すぞ」

と尋ねたので、「怪しいなあ。どなたでいらっしゃれば、このような真夜中に私を

「不思議や。

誰にて渡り給へば、

斯く深更に及びて

訪ねておいでになったのだろうか。気分は日増しに苦しくなっております。」 「そ

我を訪ひ来ませるぞや。

心地は日に添へて悩ましくこそ侍れ」。

うであろう。それこそ私の行ったことだ」と言うままに、千筋の縄をたくみに扱っ

「さこそ有らん。 其こそは我が為す事ぞ」

て捕えて縛ろうとしてきたのだった。頼光はがばっと起き上がり、「癖者めが」と

頼光岸破と起き上がり、

「憎き奴かな」とて、

言って、枕に立てて置いていた膝丸を取って、刀を抜くと同時にさっと斬る。斬ら

れて化け物はそのまま姿は消えていなくなった。太刀音に驚き、四天王の者たちは

我も我も走り参って、「何事でいらっしゃいますか」とお尋ね申し上げたところ、

頼光は「こうこうのことである」と仰る。

[保昌四天王、土蜘蛛を捕らう]

ここに左衛門尉 (伍) 藤原保昌は、右京大夫 (陸) 致忠の息子で、頼光朝臣の弟・淡

路守頼親の母方の叔父であったので、頼光にも懇意でいらっしゃった。それゆえ、

今回の異例にも、当然のように昼夜世話をしていたが、ともかくも手に火を取って席を見ると、燈台(漆)の下に夥しく血があふれて、妻戸の陰から簀子の下に流れている。「もし悪霊や化け物の仕業であるならば、斬るとしても刺すとしても、血が流れることはあるはずない。御太刀付の跡を見ましても、はなはだしく血が流れてございますのは、どのようなものでも今度の癖者は、形のあるものと考えられる。この血についていって、その居所を探し殺すべきだ」と申し上げたところ、頼光は

此血を慕ふて

其在所を求め誅戮すべし」

「ふさわしいな」と仰る。四天王もこのことに同意して、各自で松明を持って、流れている血を辿って行ったところ、北野天満宮の後ろに大きな塚があって、そこで血のあとが止まっていた。「やはりそうだ。居所はこの塚の中だ。壊すぞ、壊せ」と言うほどであったが、我も我もと塚の上にある大石を取って、投げてはどけて、

と云ふ程こそあれ、

取って投げ退け

投げてはどけて、たやすく塚を壊したのだった。平地から五六尺で底に行き着き、

投げ退け

念無く塚を崩しけり。

大石の間から木の根のようなものが現れたのを、五人の勇士が手をかけて掛け声を出して引っ張った。内部にいる癖者はたまりかねて、むっくと起き上がったところには、たくさんの大石を左右に分け、端から端までは七尺ほどの蜘蛛の姿が現れた。眼は鏡のように、口は炎を吐くかのように時々轟いて、千筋の糸を手繰りひっ

眼は鏡の如く、 口は炎を吐くが如く、時々はたゞきして、 千筋の糸を繰り掛けて、

かけて、巻き付けて倒そうと這いまわるが、五人の勇士は物ともせず、「だいた

巻き倒さんと這い巡るを、

い形があつて眼に見える程度で、どれほどのことがあるだろうよ」と、皆一度に

各一度に

ばつと迫って、縛り捕えようと組み合つた。蜘蛛は怒っている様子で鯨が吠えるよ

発と寄せて、 搦め捕らんと組んだりけり。 蛛は怒れる気色にて、鯨の吼ゆる様なる声を上げ、

うな声をあげて、八本の足を動かして払いのけ、（彼らを）倒そうと（気が狂つた

八つの足を働かして勿ね倒さんとぞ

ように）暴れたのだった。四天王の者たちは、動かすまいともみ合う間に保昌は蜘蛛

狂ひける。

蛛の背に飛び乗って、腰につけている差縄でそのまま蜘蛛を捕え縛つた。こうだつ

た具合に、その夜も明け方になって大通りを引き連れて帰つたところ、行き来する

人身分の高い者も低い者も道にあふれて見物して、「ああ恐ろしい。このような奇

妙な癖者を捕え縛ることが出来る次第、人間業ではない」と皆口々に言った。こう

皆舌を振るはせり。

して、頼光朝臣の前に引き出したところ、「不安なことだなあ。これほどの奴に惑

「安からぬ事かな。 是程の奴に誑かされ、

わされ、三十日余りも苦しめられたことこそ考えられないことである。大通りに曝

三十余日悩まされけるこそ不思議なれ。

大路に曝すべし」

しものにしろ」と仰ったので、すぐに鉄の串に突き通して、河原に立てて置かれたのだった。

[大蜘蛛退治の前例]

このような虫の類の精霊の仕業でも、このような前例はあるのかと詳しく調べると、昔人皇の始め、神日本磐余彦天皇（神武天皇）が即位して四年目の時紀伊国名草郡高野の森に全長二丈余りの蜘蛛がいた。足と手は長くて、力の強い人にも（その強さは）上回っていた。縄張りは数里に達して、行き来する人に害をなす。しか

網を張る事数里に及びて、

往来の人を残害す。

し、官軍の勅命を蒙って、鉄の網を広げ、鉄湯を沸かして四方から攻めたところ、この蜘蛛はついに退治されて、その身はズタズタに爛れてしまった。その後、十二代目大足彦忍代別天皇（景行天皇）の御代三十一年目に、筑紫の熊襲（捌）が反乱を起こしたのを、天皇は追討のために御出陣となり、始めに周防国の朝廷に背く賊徒を攻め滅ぼして、豊前国にご到着になる。この国の岩屋に土蜘蛛が住んで、たいそう人を困らせていた。その国の者たちは手を尽くして攻めたが、人を失うだけで退

其国の者共、

手を尽くして攻めけれ共、

人のみ損ずる計りにて、

治することが出来なかったのを、天皇はつる草の網を紡いで、ついに（それに）覆

誅する事能わざりけるを、

い被せ誅殺なされた。これらは全て、たくさんの人力をもって滅亡させたが、現在、このような強力な癖者を五人の勇士が生きたまま縛り捕えたことは、前の時代にも勝った名誉だなあと、褒め称えない者はいないのだった。

さて、「膝丸」を「蜘蛛切丸」と改名する。鬼丸、蜘蛛切、どちらもその効力は

其功

優劣つけがたく、一族の重宝は立派に天下を鎮め守ったのである。

雄劣なく、

一家の重器、目出たき天下の鎮護たり。

注釈

※壺・典薬頭……医薬のことを司る職の長官。

※式・瘧……熱病の一種。今でいうところのマラリア。

※参・間日……瘧の熱のない日。

※肆・我が背子が、来べき宵なり、さゝがにの、蛛の振舞ひ、予て著しも……出典は『日本書紀』。『古今和歌集』1110。衣通郎姫作。

※伍・左衛門尉……左衛門府の三等官。左衛門府は六衛門府の一つであり、右衛門府とともに宮中の諸門の警護に当たった。

※陸・右京大夫……右京職の長官。右京職は右京を管轄し、司法・行政・警察などを担当した役所。

※漆・燈台……室内照明の一つ。木製で上に油皿を置き灯心を立て、火をともし台。

※捌・熊襲……上代、九州南部において勢力を持っていた種族。

さて有名な土蜘蛛伝説です。他の資料による頼光公の土蜘蛛伝説と見比べると、本作の土蜘蛛退治は藤原保昌が中心になっているように思えますね。

この話を読んだとき、ある意味一番衝撃だったのは「岸破」と書いて「がは」と読ませる事でした。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2015/10/21

改訂：2021/3

海熊童子